



絵と文・松田洋子



53

麻生区
文化協
会会報

白鳥神社

正月四日、白鳥神社に詣でた。轎が連なってはためく階段を上がりきると、閑散とした境内の風景があった。正月だからもう少し賑やかだと思ったが、この日は仕事始めの日。すれ違った参詣者は年配の男性二人と赤ちゃんを抱いた若夫婦のみ。おみくじが東になって結ばれていた。昨日までは賑わっていたのだ。いつか元旦に来たときは、初詣客が狭い階段に列を成し、お神酒もふるまわれ、小さな神社に親しみをもったものだ。

そして八月一日、猛暑の午後であったが、写生するためにまた訪れた。参拝し、ぐるりと境内を見渡す。本堂の左側にある建物の陰を選び、スケッチを開始。山鳩がクウクウと鳴く。トカゲの子どもが身を光らせて足元に寄ってくる。風が通り、気持ちよく筆が進む。子どもが三人寄ってきた。「上手だね！」「いつから描いているの？」「描くのも速いんだね！」子どもから賞賛されて、うちわで扇がれたように暑さが吹き飛ぶ。

ここは片平・五力田地域の鎮守社である。御祭神は日本武尊で、社名は日本武尊の霊が白鳥となって飛来したという伝説に由来している。他に愛染明王も祀られ、縁結びの神としても知られ、信仰を集めている。

参拝のときに見上げると、揺らした鈴の上から龍の彫刻が目に見え込んできた。絵の中に、龍の目を二つ入れてみると魂が入った気がした。

文化協会の座標軸（専門委員）

—より高い専門性を—会長 菅原 敬子

小学三年生の算数の宿題を一緒に考える機会があった。その内容はグラフを讀んだり、グラフに表したりするもので三年生で座標軸のとり方を考えさせるものとなっていた。縦軸と横軸をどんな内容でとるのか、どうとるのか、そして縦軸と横軸が交わる点から始まること、スタートは交わったところからなのだとということである。うーん三年生に考えさせることはなかなか面白いと思った。縦軸と横軸の交差する空間のどこに点を置くかによって、その空間の意味と形はさまざまになる。

さて、文化協会の座標軸は？ 麻生区は芸術家文化人、そして芸術文化に造詣の深い方々が多く住んでおり、年間を通して市民主体の文化的なイベントや芸術活動も盛んであり地域に根づいているものも多い。また伝統伝承的貴重な文化活動も見られ

る。合わせて新百合ヶ丘駅周辺にはいくつものホールや芸術文化を学ぶことの出来る施設もあり文化的環境整備もされている。

これらの好条件をいかした活動が文化協会には求められていると思う。

◆文化協会の座標軸◆

縦軸には文化度、横軸には文化活動の内容がある。

或いは縦軸には文化への市民参加、横軸には文化内容がある。

或いは、縦軸には会員数、横軸には年令としてみる時、厳し

い高齢化の状況を示すであろう。しかも麻生区の目指す「芸術・文化のまち」づくりを考えると、文化協会の活動は縦軸に

は文化度、横軸には活動内容として自らを評価する必要があるので。

◆創立三十周年記念事業の充実◆

文化協会は昭和五十九年十一月

に創立、今年は二八年目を迎えている。少し遅れて昭和六十年七月に麻生文化センターがオープンしたことを考えても平成二六年十一月には三十周年を迎える。ここに三十年の歴史を積んだ意義のある内容としたい。

今年度の総会を前に笠原恒子氏、梶亨氏、藤田朝也氏の三名の方に専門委員をお願いしたところ快くお引き受け頂き、心より感謝申し上げます。

既にお引き受け頂いている加宮節子氏、野口力氏を含め五名の専門委員による体制がとれたことは心強いことであり、文化協会の誇りでもある。

三十周年にはそれぞれの分野でのご協力ご指導を頂けたらと願っている。

例えば藤田朝也氏には昭和六二年麻生文化センターで演出され好評を博したミュージカルオペラ「うたよみざる」等の再演をお願いできないだろうかとか、

笠原道行・秋水御夫妻にはそろって麻生区での書展をお願いできないだろうかとか。

梶亨氏には今回発行された童謡・唱歌の文化史或いは観光文

化についてご講演いただけないだろうかとか。

加宮節子氏には若い方々に伝統ある茶の湯を伝えることに力をつくしておられ、三十周年記念式典等ご来賓やお客様をお迎えするお茶席などお願いできないだろうかとか。

野口力氏には音楽の特別演奏の場を等々、会長の独断、独り言ですが三十周年には何らかのお力をお貸しくださるものと思っている。

又、文化協会の活動の幅を広め、より専門性を高めると共に深めていくバックボーンとして専門委員を新たに位置づけたものである。

文化を広め根づかせる努力の過程にこそ、真に高い文化が生まれ人の輪や絆、文化の輪がで

きるのではないかと思う。文化を通して人と人をつなぐ、人と人がつながる専門委員の方々の力もお借りしながら活動を高めよう。

文化協会の縦軸と横軸その接点は人の接点であると思うからである。

活動の起点になっっていること

菅野 明

(3)

麻生区文化協会二十周年記念誌の見返しに平成十六年十二月十日付けの朝日新聞「天声人語」が掲載されています。「天地騒々」の一年であったと書いています。天災に脅かされるが多かったようです。そして、あの。チョーキもちい。が記憶に残ったアテネオリンピックの年でもありました。今、ロンドンオリンピックの報に気がしながら、記念誌を前にして、この原稿に向かっていると、この原稿の方でも今年も数々の新記録。が報じられています。周年は不安の多い年になるようです。政治の混迷までもが似ているようです。あとの月日おだやかに過ぎたいと思つてるところです。

さっそくに親子教室の担当者になりました。人を集めて事を為すのは気遣いも多く複雑な事務もありますが、わたしにはやりがいのある役割でした。なによりも文化芸術の分野に実績があり、高く評価されている講師の先生方の教えに子ども達とともに直に触れることができたことが喜びでした。

今年も担当者として教室の世話をしていただきました。子ども達の応募意欲はなお盛んです。先生方の変わらぬ熱心な姿勢に伝統ということを思います。そして、その熱心の芸と技を秘めた教えに子ども達の目の輝きを見ました。

古風七草粥の会もよく状況も掴めぬまま推進役になったのでしたが、そのとき強く心に残ったことがあります。「ただ七草の入った粥を供えるのではない。古風の意味を考えて欲しい」という発言をいただいたことです。七草粥の会がどのような経緯で今日文化協会に宿っているのかを教えられました。黒川の野畑でなすなやこきょうを摘みながら、また、お囃子やお正月うたの雰囲気の中で、このご時世にたいする文化協会の姿勢を感じる事ができたように思います。

二十周年記念誌の杉本会長の挨拶文の中に「文化協会は変わったところのご批評をいただきました」と書いています。創立当時に思いを馳せ、理念を確認したいという意を込めて、創立時の活動に重点をおいた鼎談を企画し、記念誌に載せています。創立時の理念として

- ① 地域をあげての文化協会にした
- ② 新しい質の高い文化協会をつくる
- ③ したがって急がないを掲げています。文化協会二十年の歴史に触れることのなかった私には文面の理解はできても、おそらくはその創立時の理念の感得はできないであろうと思つています。

でも同じ文の中にあります「一つの時代でも役員・運営委員の方々の惜しみない努力があったと思えます」という言葉にすがりながら、文化協会に携わっていきたく思います。現在行事化されているそれぞれの事業には、創立時からの

願いや発想の経緯があつて、そして今日の形になってきている。そのところは知っておく必要があるだろうと思つています。

「からむし」には市・区の要職におられる方々から文化協会への期待や励ましの寄稿をいただいておりますが、そのお言葉に、おかれている立場を自覚するところです。

その中で入口前市民館長の「さまざまなジャンルの文化芸術活動が内向きな活動になりがちなところを、広く地域を意識した、公開性のある開放的な活動の方向性をぶれることなく続けられることを大事にして欲しい」というお言葉を重く受け止めたと思つていました。

今年の文化協会の総会で菅原会長は、とくに次の四点を会員に呼びかけています。

- ・新しい感覚を持つてー計画のマネリ化を防ぐ。
- ・部内の自己満足でなく外にむけ広げよう。
- ・文化芸術を通して人と人とのつながりを深めよう。
- ・区制三十周年に期す。

心しながら年間の事業に臨んでいきたいと思つています。

夢を追い真理を求めた箕輪敏行先生

千坂 隆男

生い立ち

箕輪敏行先生は大正七年(一九一八)、神奈川県橋本郡田村大字細山に生まれた。生家は、農耕馬を飼い作男を雇った農家である。

彼は小学校を卒業すると、県立厚木中学に進学した。当時開通したばかりの小田急電車に乗って、西生田から厚木まで通学した。

その背景には、関東大震災を境にして東京から逃げ出した中産階層が東京近郊に家建てて生活を始め、その生活ぶりが地方の人々にも広がった。子弟を学校に進学させると家業を継がなくなると頑なだった地方の有産階層が進学させるようになったのだ。彼は中学を卒業すると、さらに師範学校へと進み鎌倉で寮生活を始めた。

昭和十三年(一九三八)鎌倉師範卒業と同時に短期現役兵と

して入営し十月晴れて母校の生田小学校に就職した。このとき母校は生田村立生田小学校から、川崎市立生田小学校に改名していた。

科学する心

子どもが、科学の扉をたたくのは天文・気象の分野から始まる。それは両者が常に身近にあり、夢と変化を見つめられるからである。



1950年頃の細山と生家

箕輪敏行先生は、満ち欠ける月に、輝く星に探求心をかき立てられ、小学生のとき祖父遺品の老眼鏡レンズで手作りの望

遠鏡を作った。

彼が最初の給与で買ったものは、天体望遠鏡のレンズであった。昭和十七年(一九四二)彼は生田国民学校(小学一年から高等科二年まで)で気象観測を始めたが、戦争の悪化で管制をひかれてしまう。戦争は子ども達の探求心も奪っていく。

敗戦で世相の荒廃・衣食住の絶対的な不足から立ち直る最中、昭和二十二年(一九四七)分校であった西生田小学校が独立した。何もない中で、彼は一本の棒温度計を竹筒に入れ、気象観測を始めた。気象観測は、継続と比較によって科学的思考と洞察力を養う。彼の気象学の知識が子ども達の気温測定から遅霜予測となり、彼が出した晩霜予測に近隣農家の感謝があつまるようになった。その声が集まり、農林省統計事務所から観測機材の寄付と観測依頼が寄せられた。西生田小学校の気象観測は、東京管区気象台横浜調候所と農林省の気象観測所としての正式な依頼を受けるようになった。

学問と実践、郷土のために、ここに箕輪敏行先生の生き方がある。

西生田小学校の気象観測は今日もこれからも受け継がれていく。

飽くことのない探求心

昭和十八年(一九四三)二月八日の部分日食を子ども達と一緒に生田国民学校で観察してから、彼の日食観察が始まる。

一九四八年の礼文島、一九五八年の八丈島、一九六八年にはついに海外のカザフスタン(当時のソ連)アルマアタへ。一九七〇年のメキシコ日食。一九七三年のアフリカ日食の船上観測。一九七六年のオーストラリア日食。一九八〇年のアフリカとインド二点観測には、インド観測隊に参加。次の年の一九八一年にはシベリアのタマルへ。

針葉をよぎる風香

タイガーの

響きとなり水々波りゆく

一九八七年沖繩金環食。



天体望遠鏡と調整する箕輪敏行

視野に在る二百方光年

夏空の

まどろみを見つづればはせけし
本年の金環食。自宅ではどの
ような思いで観測したのであろう
か。九五年の来し方を振り返り、
一生を掛けた天文・気象観測に心
熱くなる思いがあったらう。

知的喜びを多くの人に

昭和二八年(一九五三)川崎天
文同好会を発足させ、発起人の一
人として天文普及のため働いた。

川崎天文同好会は、市内各地の
公民館などを会場に市民天文観望
会を開催した。最近では麻生区の川
崎授産学園で、彼が寄贈した天体
望遠鏡を使い年に四回開催し、彼
は必ず指導に当たっている。



横浜・野毛山の金星観測記念碑

そのほか市民天文講演会や天
文ハイキングなどユニークな会
を開き市民を魅了した。

そして、一九六五年川崎で第
一回日本アマチュア天文研究発
表会を開催し、規模は日本全体
に広がった。

おのおのの座標を持ちつつ天球に
位置する星は

今日もめぐり来

昭和四九年(一九七四)、丁度
一〇〇年前の明治七年横浜・野
毛山で、金星観測が行われた事
の記念碑を建て、神奈川県文学
の発祥としたい、という願いが
叶い、多くの助力を得て実現す
ることができた。

昭和五三年(一九七八)横浜気
象台で、神奈川県下七〇名の参加
を得て、「神奈川の気象連絡会」
が結成され会長に推された。この
会は、県下の特異気象現象につい
て共同観測調査を行い、平成二年
の竜巻雷雨、平成三年の台風一八
号の大雨についてのレポートを制
作している。

昭和五四年(一九七八)定年退
職を迎え、天文気象そして故郷の
ことに没頭することを決意した。

昭和五五年(一九八〇)

川崎市文化賞が贈られた。
人との出会い

箕輪敏行先生は自書の中で「私
は手紙魔だった」と述べておられ
る。又、「大学を出ていない一小学
教師」と卑下しておられるが、実
に筆まめで多方面に亘る知識
欲、納得いくまで追求する心には
非凡なものがある。

雪の権威中谷宇吉郎との手紙の
やりとり、真剣な質問だからこそ
頂けた喜事である。

天文学の広瀬秀夫、下保茂、齊
藤邦治、陸水学の山木荘毅。

彼の生き方に大きな影響を与え
たのは、民俗学の創始者柳田国男
との出会いである。

白足袋を履いた柳田国男に多摩
丘陵を案内する中で、成城学園の
白井緑郎と共に柳田邸を訪れ社会
科の単元学習について質問する中
で、得たものの大きさに驚いた。

「人の心の底にあるものや、常民
の生活の奥深い有様は、どうして
一片のアンケートなどで分かるは
ずはない。お互いにじっくり話し
合うことでその深層が見えてくる
のだ」(柳田国男)

歴史を数量化することで読み取
り割り切ってきた私の心の底に響

く言葉だ。

故郷への報酬

昭和四七年(一九七二)、「日本
星空を守る会」を立ち上げ事務局
長になった。当時、回覧サーチラ
イト(広告塔)による照射をせめ
て特別な観測日だけでもやめて欲
しいと立ち上がったのである。

天文学者が「公務員だから」と
尻込みする中で「じゃらくせえ」
と江戸っ子ぶりを発揮した。

川崎に「日本」と冠の付く施設
はただ一つ。「日本民家園」である。
このきっかけの「金程の伊藤家」は、
横浜三溪園に引き取られることにな
っていた。それをひっくり返し
川崎市に寄贈させた功績は箕輪敏
行先生にある。

昭和三五年(一九六〇)百合ヶ
丘駅の開業、日本住宅公団による
百合ヶ丘団地の完成に伴い、周辺
にも開発の波が押し寄せた。

細山ではデベロッパに土地を
売却するのではなく、自分たちで
開発する動きが始まった。区画整
理には三割の出目があるといわれ
る。それを使って郷土資料館を作っ
たのは細山が初めてで、最後であっ
た。故郷を愛し、故郷に誇りを持っ
た箕輪敏行先生の姿が見える。

アルテリツカ新ゆり美術展と 滝澤 修 作品

山本 絢子

毎年新百合21ホールで開催されている「アルテリツカ新ゆり美術展」で大きなスペースを占める展示に「民藝の女優さん」を描くデッサン画の作品がある。麻生区文化協会発足時から劇

団民藝(以下、民藝)の協力によって催されてきているこのデッサン画は美術愛好家はもとより、民藝ファンにも好評で、遠く千葉県や埼玉県から描きに来られる方もいるなど看板の年中行事



アーサー・ミラーの「るつぽ」のダンホースに扮した絵

である。

この展覧はただ単にデッサン会の作品を並べるだけでなく、民藝側の惜しみない力添えによって民藝俳優さん達のデッサンも特別出品され、濃密な作品展となつてゐる。この4月に開催された美術展では、民藝の創始者で絵でも超一流の滝澤修氏の油彩作品を展覧するという記念すべき展覧会となった。

滝澤家から民藝に寄贈されていた40点を超す氏の作品が早稲田大学演劇博物館に収蔵されることが決まり、その前に地元の方々に是非とも見ていただきたいという嬉しい申し出で実現することができた。

アーサー・ミラーの「るつぽ」のダンホースに扮した50号の作品は、演ずる滝澤の心理描写まで画面から感じられ、もう一枚の「74歳の自画像」は長年演劇にかけてきた氏

の人となりか巧みに表現された優品であった。

個人的なことになるが、若き日に「夜明け前」「火山灰地」「炎の人ゴッホ」「泰山木の木の下」など、枚挙にいとまない民藝作品を観てきた。

戦後の日本を背負ってきた同世代の人々が、私と同じ思いで青春の血をたぎらせ、人間性の陶冶に生きる希望のあかりとして、滝澤演劇から多くのことを享受できたことは、何と幸せなことであったことかとしみじみ思うこのころである。



滝澤修の自画像

上野の森美術館展大賞受賞に思う 津波の恐ろしさを表現 画家 佐藤 英行

上野の森美術館大賞展の巡回展も上野から京都文化博物館、箱根彫刻の森そして福岡県美術館と廻り七月二十九日で終了して一息です。開催中は講演やギャラリートークの依頼で地方の多くの人達とコミュニケーション

を持つことができました。絵の前でじっとたたずみ涙を流す婦人もいました。

福島から観に来てくれた友人も「津波のときは会議中でした。逃げのびて助かりました。高台に逃れ家や車、電柱が目の前



大賞受賞作「地鳴り」S100号

はこの絵のようでした。一瞬の出来事でただ呆然と悪夢を見ているようでした。」と話してくれました。これほど多数の人にこの一枚の絵が注目をあび、鑑賞いただき、そして全国からのたくさんのお祝いの手紙、これからの期待等に

びっくりすると共に絵の影響力がこんなにあるのだとこの賞の大きさに自分でも驚いています。昨年は三月一日に起きた東日本大震災で日本中がもとより世界中が悲しみにくれた一年でした。この震災の恐ろしさのニュースはテレビ、新聞で一日として報道されない日はありませんでした。

今回の大賞受賞作品「地鳴り」は、私の脳裏にも津波で崩壊する恐ろしい出来事が焼き付いており、この歴史的な出来事を画家として出来ることは子孫に絵画として残すことだと思いいつくりに入りました。

カメラで撮えた真実と違った角度から画家の目で感じた津波の恐ろしさを絵画として表現したかったのです。時間とか場所などの設定はまったくなく自分の顔の中にある東日本全体を凝縮して海から津波が地鳴りとともに押し寄せてくる様子を表現したものです。

会場ではよく「現場に行つてアッサンをしたのですか」と聞かれました。私は被災地には行っていません。現地に行き小さな

子供のサンダルなどを見たらとてもこのような絵は描けなかったのではないかと思います。

この絵を描くにあたり苦心したことは記録的な悲惨な光景ばかりが表面に出てくるものではなく絵画としての質の高さ、美しさをどう表現制作するかということでした。

この賞は旧安井曾太郎賞の後を継ぐ賞として常陸宮殿下総裁のもと出来た大賞展で画家の登竜門とされています。いまさらという気もしますが画家には年は関係ないのが嬉しい。



常陸宮殿下に絵の説明をする筆者

会員の活動

梶 亨著 童謡・唱歌の文化史

本会報「からむし53号」の2ページに紹介された当文化協会専門委員の梶亨さんが本年4月に表記の題名の本を出版された。広報委員会の編集会議でこの本の紹介をすることになり、早速本屋さんでこの本を求め読ませていただいた。読んでいて目頭が熱くなる場面もあり、私たちが日本人の心のふるさとを想い起こさせてくれる内容の本であった。この本を手にしたとき、私



梶 亨

童謡・唱歌の文化史

はしばし表紙の絵に見入ってしまった。8年ほど前に長野県の飯山の丘から見た一面の葉の花と千曲川そして遠くにそびえる北信の山々の景色が想い起こされた。そして、この本を読み出してすぐに作者の梶さんがやはりこの景色に感動されたことを知り、しばらく感慨にふけてしまった。この本の素晴らしいところは、その歌がいつ頃誰によつて作詞・作曲され、詩の舞台になった所はどこかということだけでなく、作詞者・作曲者が生まれ育った環境、そして、その詩を書いた頃はどういうような生活を送っていたかということまで書かれているので、作詞者

がどのような気持ちでこの詩を書いたかを自分なりに想像することができるのです。明治時代に長野県の飯山で育ち、後に文部省の唱歌編纂委員にもなった高野

辰之のことがこの本の中程に詳しく書かれています。少し私事になりますが、私が今から40年ほど前に横浜の中学校で担任した男子生徒の一人がその後信州大学の教育学部を卒業し、長野県の飯山で小学校の教員になりました。「臘月夜」や「故郷」など数多くの作品を残した高野辰之も飯山で小学校の教員をしていた時代があったことも彼から聞いたことがあったので一層この本に親しみが湧きました。この本で高野辰之のふるさととして紹介されている中で「高橋まゆみ人形館」のことが書かれている。梶さんもこの人形を心細む作品と書かれておられますが、私もこの高橋さんの人形を見たとき全く同じ感想を持ちました。黒柳徹子さんも絶賛したという川崎市中原出身の人形作家、与勇樹さんの作品を以前に見たときも同じような感想を持ったことがあります。梶さんが書かれたこの本は是非みなさんにも読んでいただきたい一冊であります。梶さん、素晴らしい本の出版を本当にありがとうございます。(岩田輝夫記)

編集後記

▼からむし五十三号の表紙を飾るのは、松田洋子さんです。麻生区文化協会はさすが芸術家揃い。お忙しい中、快くお引き受け頂き委員一同感謝しております。▼ロンドンオリンピック・パラリンピックでは、様々なドラマがあり、沢山の感動や勇気そして頑張る気力を頂きました。しかしメダル獲得への報償金の格差には驚きました。パラリンピックへの理解や支援が重要ではないでしょうか。▼本会顧問であり、図書館長の池原真穂が、六月三十日にご逝去されました。本当に突然のことです。運命の無情さを感じております。心よりご冥福をお祈り致します。合掌 (岡本記)

岡本 田鶴子・岩田 輝夫・畔田 二郎
千坂 隆男・橋本 周・佐藤 勝昭
小田 島寛

麻生区文化協会会報
からむし 第五十三号

平成二十四年九月三十日発行

発行人 麻生区文化協会

会長 菅原敬子

編集 麻生区文化協会

広報部

川崎市麻生区万福寺一五一一

麻生文化センター内

☎ 〇四四一九五一―三〇〇

印刷 (株) エリアブレイン